

八世紀の?帯に示される授位：東北末期古墳例を通して

著者	伊藤 玄三
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	36
ページ	1-15
発行年	1984-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10279

八世紀の銚帶に示される授位

——東北末期古墳例を通して——

伊 藤 玄 三

は し が き

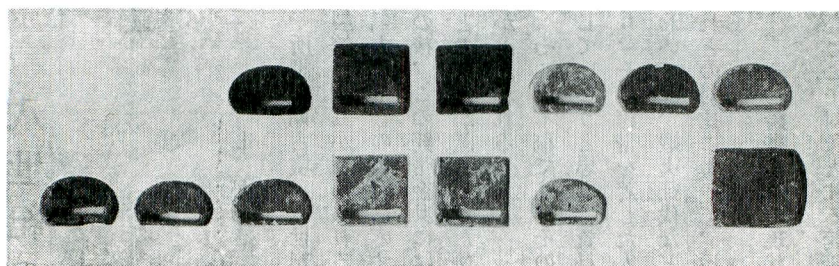
所謂末期古墳（八世紀に位置づけられる点では墳墓とすべきかも知れないが）から出土する有効な年代資料として青銅製銚帶金具が認められることは、今日ではほぼ周知の事として良いものであろう。筆者は、かつてこの銚帶金具の性格が「衣服令」の規定に應ずるものであり、年代的にもほぼ八世紀の中で考えていけるものであると論じたことがある⁽¹⁾。その後、この銚帶金具には大きさ等の点で幾種類かの分類が可能であることが指摘され、実際にその類別されたものと位階との対比が試みられた例もある。しかし、その対比が如何程可能性をもつものであるかの検討にまでは及んでいなかったかと思われる。

そこで本稿では、その銚帶金具に示される位階を、特に東北末期古墳出土の例を通して考えながら、授位の背景を検討していこうと思う。資料として末期古墳をとりあげるのは、比較的銚帶金具が散逸することなく発見されるのが墳墓であり、その銚帶を着した人物もまた被葬者として特定できるといふ利点があるからである。それと共に、八世紀代の東北においては、蝦夷征伐などにも関連して授位の記事が散見しており、在地首長などの位階もある程度知ることができる。それとの対比によって、授位の具体相を推測できるものがあるうと考えるからである。

一、銚帶検討の現状

ここで対象とする銚帶金具は、いうまでもなく古墳時代に知られている金銅透彫の銚とは異なり、無文・簡素な作りの

八世紀の銚帶に示される授位（伊藤）



第1図 岩手県縦街道古墳出土鍔帯金具（東博蔵）

〔鉸具は欠〕

青銅製鍔である（第一図）。鉸具・巡方・丸軔・鉈尾からなるこの鍔帯金具は、扁平な裏金具を伴って革帯に装着されたものであり、時に平城宮跡出土品例の如く漆を塗った痕跡を遺すものもある。即ち、出土品の多くは、衣服令に見られるところの「烏油腰帶」に相当するものであることが知られるのである。そして、この烏油腰帶は、金銀装腰帶が文武の五位以上が用いるに對して、六位以下の下級位階者の着するものであった。その六位以下における具体的差異については、令の規定には記されていない。

ところで、遺物としての鍔帯金具を見ると、形態上でも若干の差を示すものがあるし、大きさの上でも差異が指摘できる。筆者が昭和四三年に鍔帯金具をとりあげた際には、論点を年代考定に据えたこともあって、単に「位階に応じた差異」が存在するであろうとすに止めている。しかるに、昭和五〇年には『平城宮発掘調査報告』VIが刊行され、その中で、佐藤興治氏の執筆で鍔帯金具について述べられ、分類と位階比定がなされた。ほぼ同時期頃に執筆されたと思われる阿部義平氏「鍔帯と官位制について」が翌五一年に発表され、共に位階と遺物の鍔帯金具の関連が追究されることになった。

佐藤氏の扱われた範囲は、いうまでもなく平城宮跡出土の青銅製鍔帯金具の検討を骨子とするものであるのに加えて、衣服令との対比・石鍔帯にも及ぶものである。特に、平城宮跡SD650出土品二例を通しての鍔帯の分類は、従来知られることのなかった種類の、同一遺跡での出土を踏まえたものである点で注目すべきものであったといえよう。その分類では、青銅製鍔帯をA・B・Cの三系列にされ、Aは文官帯に、Bは武官帯に比定できようといわれ、さらにCは非公式の鍔帯とも考えられるかとさえも述べられている。そのA系列の鍔とされたものには計測値での差異上からAⅠ～AⅥの各段階があり、それぞれAⅠⅡ6位、AⅡⅡ7位、AⅢⅡ8位、AⅣⅡ大初位、AⅤⅡ少初位、AⅥⅡ無位とい

う比定も試みられている。ここに、鍔帯金具が具体的な位階との対比がなされた例を見ることとなったといえよう。

ところが、これと前後して執筆されたと見られる阿部氏も、同様に位階との対比を試みられている。阿部氏の場合には、平城宮跡出土品にもA系列・B・特殊丸軋が出土するという分け方には相似たものがあるといえようが、A系列とされるものに八段階が識別され、各三ミリ幅（即ち一分幅）の差をもつものと捉えられた。そして、それは六位以下初位までの正・従の八ランクに対応するものと考えられ、さらには鍔の長さの差異によつては各位階の上・下の細別にも応ずる一六ランクの対応も可能であると述べられている。この阿部氏の鍔帯分類は、計測値の上では三ミリ幅という一定の差に基づく細別をとらえている点で注目されるし、位階に対比すべき鍔帯金具の寸法もより詳細になったかと思われる点で前者とは差異がある。

以上のように、平城宮跡における比較的恵まれた出土品を例とする鍔帯金具の分類が見られるようになったことは、この分野においても大きな収穫をもたらしたといえるが、分類上でも若干の差異を示す如くなお問題は残されている。けれども、八世紀代腰帯のあり方からすれば特に文献上での大きな変化も無さそうであるから、一定の法則的理解が可能なおける細別がどれ程対比していけるか、それがどれ程の妥当性をもちうるかが課題であろう。遺物上での細別の点では、阿部氏の三ミリ単位の分類はより精しいものがあり、しかもそれがかつての一分という尺度との関連で理解できるものとするれば、有力な可能性をもつものと考えられる。ところが、その阿部氏の分類でもA系列もあればB系列もありそうであり、佐藤氏の場合にはC系列もある。同一基準ではないとしても、これらの系列的差異もあるとすれば、それらが明確化されない限り全体像は浮かびあがってこないかも知れない。

けれども、これまで知られてきているかぎりでは、かなり一般的かと見られるA系列の鍔帯金具が多いようであり、それでの細別が位階との対比でも容易でありそうである。他のB系列などの場合は、例えば佐藤氏の武官帯とか、阿部氏の無位層や武官帯への想定があり、共にもう一枠別系列のものとする考えがある。例数の点からも、一般的と見られるA系列の鍔帯金具が基本と捉えられるとすれば、これを具体的な位階との対比で考察していくことの意味もその点で認めうる

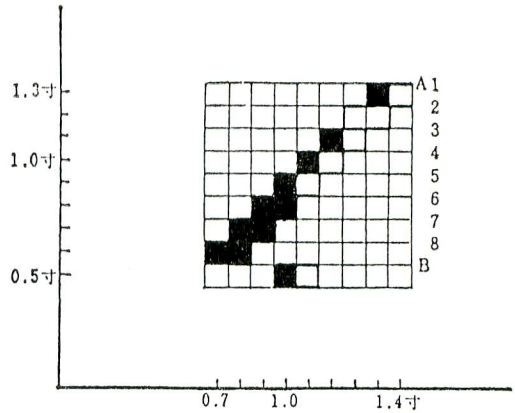
ものがあろうかと思われる。

その点で、具体的な位階へのA系列銚帯の対比は佐藤氏・阿部氏共に試みられているところであるが、その対比が漠然となされている限りでは妥当性は証明できないだろう。そこで、筆者はかつて末期古墳の年代考定の折に扱った東北の古墳若干例を再びとりあげて、その位階対比の試みを進めていきたいと思う。

二、銚帯金具と位階

銚帯金具を具体的に検討して位階との対比を試みたのは、前述した佐藤・阿部両氏のものを代表的なものとする事ができよう。

そして、そのうち佐藤氏の場合にはA系列六種(AⅠ～AⅥ)をそれぞれに六位以下無位に比定した。そのA系列の各種の間には五ミリずつの減少数値が見られ、天平尺に換算した場合の一分五厘に相当すると見ている。その基準尺度は、実は最大銚帯AⅠの帯幅が一寸五分であったと見られるという見方とも関連するものであり、いわば一寸五分を基準とするその十分の一の数値が種別間の格差となるものである。この見解は、遺物上で分類できる銚帯金具の具体的な差異の基準を求めた点で注目されるところである。しかし、実は氏自身も述べている如く、AⅣとAⅤの間には三ミリの減少差が認められる。これは、もし同系列のものにおける数値差が四ミリとした場合には異例のものとなる。その点で氏は、一応AⅣを大初位・AⅤを少初位に当てながらも、初位のみが他の六～八位の如く位毎に相当する原則からはづれる矛盾を解釈し、①AⅤが中間的であるのはAⅣに付随して作られたものであり、AⅣの範囲に納められるべきものと考え、初位は区別なくAⅣということになるか、②AⅤの丸軋が明瞭でない点からも、製作上の誤差範囲内に含まれる、とする考え方を示している。従って、その場合AⅤというのは実在しなくなることとなる。このように解釈しなければならなかったのは、銚帯金具の計測値に基づく分類が、位階に比当した時に一貫性をもたなかったということである。その為に、位階を重んじて、銚帯金具の分類を左右することになった。果してこれが妥当するであろうか。確かに、遺物としての銚帯金具は青銅鑄造品であり、規格性を有するものであることは事実である。鑄造・整形などの段階での少



第2図 巡方の規格復元図（阿部義平氏による）

差もあり得るものであろうし、遺存に関わる条件も考慮されるものがあろうけれども、なお若干計測値上からの検討も必要と思われる。

その点で、阿部氏の計測値に基づく分類は詳しいものがある。阿部氏は、袴帯金具の計測値間には三ミリ幅の段階的差異があるとされ、即ちほぼ一分間隔の尺度差で分類できるものとし、A系列としたものに八種を考えた。しかも、そのそれぞれの種別の中には、二類の内容が含まれることが図示（第2図）されている。とすれば、袴帯金具自体の計測上ででの多種類の把握が可能な阿部氏の成果の方が詳しい点で魅力をもたれるものである。

袴帯自体が衣服制度に関わるものであり、規格的であると思われるから、その付属する袴にも当然規格性があつたことは想定される。唯、衣服令の規定の中にもその具体的記述は見ることができない。それにもかかわらず、現実の遺物である袴帯金具には寸法差が認められる。とすれば、今述べてきたような分類に相当する位階差が存在したことは容易に想定できるところかと思う。その場合に、袴帯金具自体における分類の妥当性が第一条件となる。

その点で、より詳細に計測値に基づいて分類をすれば、恐らく実体に近い区分となるものと考えられるが、阿部氏の分類は詳細かと思われる上では妥当性が強いかわる。勿論、三ミリ一分という基準寸法や計測上の誤差などの点の問題は皆無とは思わないが、少くとも最も多くの例での計測値にもとづく成果である点を尊重して考えれば、適用して考察を進めていく理由は十分であろうと思う。

そこで、第2図として阿部氏の図を転載させてもらうことにした。この図では、縦に帯幅に應ずる一・五センチ（五分）～三・九センチ（一寸三分）が、横に袴幅二・一センチ（七分）～四・五センチ（一寸五分）まで示されているが、そのうち最も小形の一・五センチ×三・〇センチの例は、B系列とされるものである。さし当ってここで問題とするA系

列をみると、極めて整った形の配列を示すものであることをよみとることができる。そして、縦軸の数値に対して横軸の数値には三ミリ幅の二類が存在することが知られる。比較的大形のA1と5までは例を欠くものがあるが、小形のA5と8では、それが典型的に知られる。

このA系列の八種乃至それをさらに二類ずつに細分した十六ランクが、位階に対応させることができることは既に阿部氏も述べているが、控え目に具体的位階に触れているところである。しかし、これだけの分類が可能であるとすれば、積極的に位階との対応を考えても良いであろうと思う。即ち、今の規定による烏油腰帶Ⅱ黒漆塗青銅鍔帯の使用が六位以下であることからいえば、六位と初位は四段階である。ところが鍔帯金具は大略八段階あるということになるから、敢えていえば、四つの位階の中の正従階をも反映するものとすれば八段階に対応できるものとなる(付表)。さらに、三ミリ幅

鍔分類	対比位階	古 墳 出 土 例
A 1	a 正六位上	
	b 正六位下	
A 2	a 従六位上	
	b 従六位下	
A 3	a 正七位上	縦街道・鳥矢崎二号・神楽山
	b 正七位下	
A 4	a 従七位上	
	b 従七位下	
A 5	a 正八位上	
	b 正八位下	
A 6	a 従八位上	熊堂
	b 従八位下	
A 7	a 大初位上	下釜
	b 大初位下	
A 8	a 少初位上	
	b 少初位下	

付表 鍔帯分類と位階対比 (試案)

で横幅の差を有する二つの類別を考えれば、各正従階の上下を示す可能性を考えることができる。このような対応が可能であるとすれば、それは紛うかたなく令制下級位階を如実に示すものであるということになる。A系列十六ランクの分類は、当に対応関係で位階と一致するものがある。勿論、この場合もまたこれらの鍔帯金具が一定時期同一制度下にあったということが前提である。

ところで、このような鍔帯金具に示される鍔帯の規格が衣服令の規定と矛盾することなく対応させて理解して良いものかどうかを検討する必要がある。さらに言えば、令規定

では単に烏油腰帶と記載されている内容が、果して位階に応じた差異をどれ程に示すものと捉え得るかということの検討である。そこで、腰帶の制の知られた令義解朝服条を考えてみることにしよう。

朝服条の記載をみると位階に応じて服装における差異が良くうかがえるが、その差異の著しいものとして衣色がある。そのうち、当面問題である六位以下に関わる衣色をみると、六位は深緑、七位は浅緑、八位は深縹、初位は浅縹であり、この場合には位ごとに差異を示している。また、「以緒別正従。以結明上下。」とあり、正位は紫緒、従位は緑緒であると共に、上階は二結、下階は一結であったことが見えている。即ち、位は衣色で、正従位は緒で、さらに上下階は結で区別されるものであったことが知られる。このほかには、服色に従った袋があったが、皂纓頭巾や烏油腰帶などは詳細な差異は記されていない。

これらの記載からみると、衣服の制の上では明確に差異を記述する部分においては、正従位のみならず上下階にも及ぶものがあつたことが知られる。ところが、他の部分では一括して六位以下として扱われている。しかし、だからといってこの差異無記載の部分のものが全く区別がなかったとはいい難いであろう。服色における差異が上下階まで及んでいることは、他の部分でも差異があつたことを優に推測させるものがあり、事実鈐帶の鈐には差異があつた。そうみれば、この朝服条の記載も大枠における規定であり、実は細部における差異が隠されている可能性があることになろう。そして、その差異がどの段階まで及ぶかといえ、結の側から考えて上・下階まで及ぶものであつたと推測できそうである。その推測は、令制下の諸規定のあり方から考えても貫徹されているとみるのが妥当であろう。

このように朝服条の記載を理解していけば、烏油腰帶の内容にも実は差異があつたことが考えられる。それはまた、正倉院蔵の鈐帶における帯幅の差異にも現実に見られるところであるし、同様に出土品の鈐帶金具の差異ともつながっているものである。

三、出土例の位階

さて、いま述べてきたように鈐帶金具が分類でき、それが位階と対応するものであると捉えられるとすれば、具体的な八世紀の鈐帶に示される授位（伊藤）

古墳出土例でそれをみていこう。

- | | | | |
|---|---------------------------------|-----|----------------|
| 1 | 岩手県胆沢郡金ヶ崎町西根縦街道 ⁽⁸⁾ | 巡方例 | 縦三・三センチ横三・五センチ |
| 2 | 西根下釜 | 巡方例 | 縦二・四センチ横二・八センチ |
| 3 | 岩手県花巻市熊堂 ⁽⁹⁾ | 巡方例 | 縦二・四センチ横三・〇センチ |
| 4 | 宮城県栗原郡栗駒町鳥矢崎二号墳 ⁽¹⁰⁾ | 巡方例 | 縦三・四センチ横三・六センチ |
| 5 | 山形県東置賜郡高畑町梨郷神楽山 ⁽¹¹⁾ | 巡方例 | 縦三・三センチ横三・六センチ |

この五例は、比較的に銚の巡方の数値が知られ得るものである。これらにおいても、計測値は必ずしも厳密とはいえないかも知れないが、ほぼ阿部氏の分類区分に近い値が見られるので、その該当位階を推測することができる(付表)。そのうち、岩手縦街道・宮城鳥矢崎二号墳、山形神楽山例では縦三・三〇センチとすれば上階に考えることができ、正七位下に比定できよう。ある点で A 3 に対比され、しかも横幅が三・六とすればその下階と見ることがができる。即ち正七位下に比定できよう。同様に岩手熊堂例は A 6 に対比され、その横幅が三・〇センチとすれば上階に考えることができ、従八位上に対比できる。岩手下釜例は、A 7 に属し、下階となろう。即ち大初位下相当であらう。

このような位階への対比は、厳密さの点で問題はあるかも知れないが、少くとも位の段階ではかなりの可能性があり、正従位でもさして隔たることのないものかと考えている。一つの比定の試案ではあるが、可能性の高いものと考えている。そこで、これらの位階を示す銚帶金具が出土する遺跡をかえりみれば、それは径一〇メートル前後の末期古墳であった。そうすれば、それらの銚帶金具に示される位階を帯した被葬者は、当然下級の位階を有した人々であったことを具体的に示していることになる。このような六位以下の有位者の存在が考古学的にも知られたことになるが、それはまた東北地方では文献上でも知ることができる。

四、八世紀東北の授位例

銚帶金具の出土に知られる八世紀代の東北は、一般的には律令政府による東北開拓、そしてそれは蝦夷征伐の舞台でも

あった。唯、この律令制度的な銚帶金具などの遺物が動乱の東北にいつでも入り得たとは思わず、やはり律令政府の側からの現地への進出が可能な条件下で受容されたものであらうと考えたことがある。⁽¹⁾ いうまでもなく令制下の地域においてはそれは問題とはならないが、宮城県北部以北のような夷地では問題とならう。けれども、これらの地域も全く令制下の地域とは無縁ではなく、しかも朝貢関係などを含めて律令政府との断続的なつながりを保有していたことがあったと推定される。それも、その地の蝦夷と律令政府の関係が友好的であることが前提であったことは、極めて断片的な史料から窺知できる。事実、宝龜九年⁽²⁾（七七八）に見える外従五位下吉弥侯伊佐西古の例では、天応元年（七八一）には単に伊佐西古とのみみえ、一以当千の賊首の一人とされている。夷地出身者の伊佐西古は、前者では蝦夷征伐の軍功によって昇叙されているのであるが、宝龜十一年⁽³⁾（七八〇）の伊治公弼麻呂の乱以後は夷地へ還って反律令勢力となっていることが推測できるし、その結果として当然律令的地位は剝奪されることになったものであらう。特に東北北部との関係が悪化すると思われるのは、宝龜五年⁽⁴⁾（七七四）正月における「停蝦夷俘囚入朝」⁽⁵⁾時以降ではないかと考えている。それまでのいわば友好的関係に基づく朝貢関係が一方的に律令政府側によって停止されるからである。勿論、その停止の前提として両者の関係がおもわしくなくなってきた事情もあったであらう。そして、それらの状況の凝集したのが伊治公弼麻呂の乱とでもいうべきかも知れない。いうまでもなく、このような両者の関係は一般的な情勢として把握られるものであり、夷地出身者の中にも律令政府側に加わって軍功を表すものもあり、錯綜した関係も部分的・时期的にはあり得たことは当然であらう。

そのような令制領域と夷地の接する錯雑した地域という事情をかかえながらも、これらの地域にも位階を有する者は存在するし、その位階のあり方もある程度知ることができる。唯、ここでは接攘地帯から以北のみではなく、やや広く東北南部も加えて史料を眺めることにする。

東北地方においても授位の記事が見えるのは大化以降であり、特に斉明朝の阿倍氏の日本海側の北進は画期的である。

この北進に伴って柵養蝦夷や各郡の郡領等に位階を授けたとされる。その場合の位は一階又は二階と記され、具体的な例では斉明四年⁽⁶⁾（六五八）⁽⁷⁾の鰐田蝦夷恩荷に小乙上、淳足郡大領沙尼具郡に小乙下、同少領宇婆佐に建武、津輕郡大領馬

武に大乙上、同少領青蒜に小乙下、淳足柵造大伴君稻積に小乙下などが知られる。この斉明四年の記事は他のこの頃の記事に比較して詳しい内容をもつが、それから知られるところではほぼ建武から大乙上までの範囲であったということになる。即ち後の初位から八位に相当する下位の位階であったということである。これらの記事自体にも齋田・津輕の建郡などの点での問題はあろうけれども、一応当時の授位の状況を推知することは十分可能であらう。

八世紀に入つての授位又は位階記事は、銚帯の存続期間八九年間（慶雲四年～延暦十五年）に五六例ほど認められる。それらの記事を見ると、第一に大部分外位である。但し例外はあつて、桃生郡人道嶋宿禰一族には内位が与えられているし、渡島津輕津司諸君鞍男・標葉郡人丈部賀例努などが内位である。もう一つの例は天平勝宝元年（七四九）⁽¹⁶⁾の陸奥貢金に際して授位された獲金人上総国人丈部大麻呂、治金人左京人戸淨山の場合がある。これは特例の授位である。これらから見ても、東北の在地出身者の場合には圧倒的に外位であったことがわかる。

第二に六〇%は六位以下であり、その初位までの史料上での分布はほぼ同等である。試みに多数の人名の知られる神護景雲三年（七六九）⁽¹⁷⁾三月の賜姓記事をあげてみよう。

陸奥白河郡人	丈部子老	外正七位上
賀美郡人	丈部国益	
標葉郡人	丈部賀例努	正六位上
安積郡人	丈部直繼足	外從七位下
信夫郡人	丈部大庭	外正六位上
柴田郡人	丈部嶋足	外正六位上
会津郡人	丈部庭虫	外正八位下
磐城郡人	丈部山際	外正六位上
牡鹿郡人	春日部奥麻呂	外正八位下
日理郡人	宗何部池守	外從七位上

白河郡人	靱大伴部繼人	外正七位下
黒川郡人	靱大伴部弟虫	外従六位下
行方郡人	大伴部三田	外正六位下
荏田郡人	大伴部人足	外正六位上
柴田郡人	大伴部福麻呂	外従八位下
磐瀬郡人	吉弥侯部人上	外正六位上
宇多郡人	吉弥侯部文知	外正六位下
名取郡人	吉弥侯部老人	外正七位下
賀美郡人	吉弥侯部大成	外正七位下
信夫郡人	吉弥侯部足山守	外従八位下
新田郡人	吉弥侯部豊庭	外大初位上
信夫郡人	吉弥侯部広国	外少初位上
玉造郡人	吉弥侯部念丸	外正七位下

この賜姓関係記事に見られる位階は令制内の例ではあるが、当に標葉郡人丈部賀例努を除いて外位であったことが良く知られるし、その範囲も六位から初位まで網羅している。これが最も典型的な地方位階のあり方であろう。

しかし、このほかの位階として宝龜年間以降に従五位以上の例が若干多くなる。それは一つの理由として征戦の軍功に基づく授位であり、多くは外従五位下である。又、例外的に高い位階となる従五位及び正四位が認められるが、道嶋嶋足・三山などの例である。

以上見てきたところは位階の具体相であるが、さらにこれらの位階が総じてどのような契機で与えられているかを考えよう。それはいわば令制外の夷地にまで位階が及んでいるからの検討である。即ち、授位の一般的なあり方からすれば、令制下にあつては前述した如き有位者は郡司層クラスかそれに匹敵する在地有力層と思われるから、何らかの形で令制的

機構と関連をもち、その中で授位・昇叙が行なわれている例であろうと思う。いわば律令下級官人層的立場における通常授位とでもいうべきものである。ところが、古代東北においては、夷地と接する為に生ずる特別の授位が存在する。その一つは征夷や築城などに際して与えられる軍功での授位である。特にこの種の軍功授位は奈良末以降に目につくが、本来的には軍功は勲位が相当するものであるべきにも拘らず授位が行なわれている。勿論、勲位も賜与されているが、特賜とされたものであろう。奈良末東北の動乱の苛烈さの反映でもあろうか。そのほかに、全く一時的な性格を有する特別授位がある。その一例は陸奥貢金の際の如きものである。そしてもう一つの例は対蝦夷の内附・朝貢に際するものである。これの場合、広い意味では夷地にまで令制的機構を及ぼす政治的性格をもつが、内国での支配形態とは同一でないことは明らかである。むしろ極めて名目的な夷地における在地族長権の承認とそれに応ずる授位であろう。しかし、その授位そのものは令制下の場合と殆んど同様の形となったものであったかと推測される。夷地であるという点での差異の避け難さは包含されているとしても、令制下での出土鎔と同じものが夷地からも発見されることなどはそれを証するものである。

さて、これらの文献上からの授位のあり方を見てみると、東北の令制下の地域においては位階は外位が圧倒的であり、六位以下が主であったことが知られ、しかもそれらの授位の背景には通常例のほかに軍功などの特例も含むものであった。ところが、蝦夷に対しても位階の具体相は知り得ないが授位の例が断片的に見え、それもまた臨時的授位の例として存在したことが知られるのである。その授位の実体は、文献上では記されていなかったが、考古学的資料である鎔帶金具の中に示されている。先にも述べたように、その鎔帶金具の検討を通して考えた結果では、まさしく正七位下・従八位上・大初位下など（附表）の位階に比定できそうであり、平城宮跡出土品とも対応する内容のものであった。ここに、位階の広がりの確実な姿を読みとることができそうである。

五、鎔帶と末期古墳被葬者

以上見てきたところから、八世紀に年代性をもつ鎔帶金具には、その計測値上の分類から六位以下の下級位階に相当さ

せ得るものがあることが知られ、特に賜姓記事などに見られる東北在地の有位者などの対比で考えればまさしく六位以下の位階の保有者が多く存在したことが指摘でき、フィールド上での遺物分布と文献史料の対応が良くうかがえると思えることができた。

ところで、銚帯金具自体は、遺物として全国的に出土するものであり、既に三〇余例の遺跡が知られている。そして、出土遺跡の種類も宮殿・官衙・墳墓・住居など広範囲に及んでいる。唯、これらの遺跡の中でも製作地や使用者の活躍の場における出土は、銚帯金具の出土もまとまりのあるものとはならず、散発的となる事が多い。その点で、墳墓出土品の場合においては着装品乃至副葬品として一具分の出土の可能性もあり、かつ被葬者との具体的関連が知られる点で注目すべきものがある。本稿で敢えて末期古墳出土品のみをとりあげている理由もそこにある。

さて、先に見てきたように東北末期古墳出土品中に見られる銚帯金具には、付表で知られるように岩手縦街道・宮城鳥矢崎二号墳・山形神楽山例は正七位下ぐらいに対比できそうである。そして、岩手熊堂は従八位上、岩手下釜は大初位下相当かと思われる。これのうち、縦街道（第1図）鳥矢崎・下釜の例は一具分の遺存が極めて良好なものといえる。これらは、本来完全な一具分が革帯に装着して存在していたものであるが、時に一部が調査乃至発掘時点までの事情で失われた可能性はある。ともあれ使用時の欠損などで失われる以外には、欠けることのないと思われる銚帯の存在がこれらの古墳で明確である。ここには、明らかに銚を装着した帯があったことになり、それはとりもなおさず衣服令における朝服のあり方を想定させるものとなる。今は既に有機物は失なわれてしまっているが、当然のことながら令規定に相応した服色を有する衣服などが存在していたことは容易に推測できるところであろう。

このような銚帯金具からの復原によって、まづ東北末期古墳被葬者の具体的な姿が髣髴となってくる。この被葬者のあり方は、例示した如く令制内のみならず北上川中流域の夷地にも及ぶものであり、八世紀にかける朝貢関係などを通した律令的文物の波及の確かさが知られる。勿論、それが令制内の文物と同様のものではなかったとしても、夷地の族長への賜位・賜物に関わるものであったことは、政治領域の限界外であったことから明らかである。それはまた、ひるがえって考えれば令制内地域における制度的あり方の確かさを証するものであらうと思う。

事実、本稿ではとりあげてこなかったところであるが、鍔帯金具出土の古墳は広く知ることができ、長野県埴塚・山口県見島⁽¹⁹⁾・鹿児島県新富⁽²⁰⁾などあり、出土状態の検討も必要ではあろうが小円墳・横穴などの各種の古墳に及んでいる。唯、現在知られている範囲ではこれらはいわば地方の墳墓であり、畿内方面の同時代の火葬墓などとは異なる様相を示しているようである。これが事実とすれば、八世紀における墳墓形態における畿内と地方の差異というべきものが具現されていることになり、さらには律令国家内における文化的差異の証拠ともなるものである。

ともあれ、八世紀東北を例として、在地族長層の墳墓の幾つかには下級位階者が葬されている事を指摘でき、しかもその位階も鍔帯金具を出土する例においてはかなり具体化できることが明らかとなった。今われわれが追求できるこの地の被葬者の具体相はこの位階が限界である。勿論、文献上で見られる該当地域での氏族名などから関連させて、その氏族名までの推定も可能かも知れないが、確実性の問題が残ろう。このような墳墓被葬者の特定は、畿内方面における火葬墓などに伴なう墓誌の存在例に見られる如く住所・官職・姓名などの多くの知見を与えるものとはならないが、それに次いで「位階」を明示する点では重要な意味を有する。どちらかといえば欠落の多い文献のみでは知り得ない古代の実相へのアプローチの一つとはなるであろう。

むすび

以上、東北末期古墳出土の鍔帯金具を例として、文献史料も採用しながら八世紀墳墓の有位被葬者の存在を明らかにしてきた。その要点は、出土品としての鍔帯金具が八世紀の下級位階に應ずる烏油腰帯の鍔であり、その分類からして相当位階が推定できるということ、その具体的な位階の推定を東北末期古墳例で試み、関連地域の文献史料からみても下級位階者存在の可能性の強さを指摘できるということ、さらには、広く末期古墳の被葬者―地方墳墓被葬者のあり方と畿内火葬墓被葬者にも触れ、八世紀の地方と畿内のあり方をも示唆した。

ところで、これまで述べたところは地方墳墓被葬者の特定の可能性をも示すものであり、より無名の被葬者を追求することでもあった。とかく記録に止められることのなかった被葬者も、前述の如く見れば位階までは鍔帯金具によって明確

化できることになる。いうまでもなく、本稿も一つの試みである。銚帯金具自体の分類或いは位階の比当に可能性が強いとしても、なお十分に検討すべきものがあることは課題としてのこる。御教示を乞うところである。

註

- (1) 伊藤玄三「末期古墳の年代について―東北地方末期古墳出土遺物を通して―」(『古代学』第十四卷第三・四号) 昭和四三年
- (2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ―平城京左京一条三坊の調査―』(『奈良国立文化財研究所学報』第二三冊) 昭和五〇年
- (3) 『令義解』衣服令朝服条
- (4) 佐藤興治執筆分「金属器」(注(2) 一五四―一六一頁) 前掲
- (5) 阿部義平「銚帯と官位制について」(『東北考古学の諸問題』) 昭和五一年
- (6) 阿部義平前掲第六図、三三四頁
- (7) 帝室博物館『正倉院御物図録』昭和三年
- (8) 帝室博物館『天平地宝』昭和一二年
- (9) 小笠原迷宮「和同銭を出土した陸中国熊堂の古墳群」(『考古学雑誌』第一四卷第七号) 大正一三年
- (10) 栗駒町教育委員会『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢崎古墳調査概報』(昭和四六年度栗駒町埋蔵文化財報告) 昭和四七年
- (11) 西村真次『置賜盆地の古代文化』(『郷土研究叢書』第八輯) 昭和一三年
- (12) 『純日本紀』宝亀九年六月庚子条
- (13) 同 前 宝亀十一年三月丁亥条
- (14) 同 前 宝亀五年正月庚申条
- (15) 『日本書紀』齐明四年夏四月条及び秋七月甲申条
- (16) 『続日本紀』天平勝宝元年閏五月甲辰条
- (17) 同 前 神護景雲三年三月辛巳条
- (18) 藤森栄一「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」(『考古学』第一〇卷第一号) 昭和一四年
- (19) 山本博「長門国見島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物」(『考古学雑誌』第二五卷第八号) 昭和一〇年
- (20) 鹿児島県教育委員会『鹿児島県文化財調査報告第四輯』

八世紀の銚帯に示される授位(伊藤)